

第13章

広島県支部における災害救護活動の歴史



広島県支部における災害救護活動の歴史

世界に先駆けた日本赤十字社の災害救護活動

日本赤十字社が初めて災害による被災者への救護活動を行ったのは、明治21年7月に福島県で起こった磐梯山での噴火災害でした。

本来、赤十字は戦争の負傷者を救済することを目的に設立されたことから、当時は国際的に見ても戦時救護の規定しかなく、この救護活動は皇后陛下(後の昭憲皇太后)直接のお声がかりにより始められました。このことがきっかけとなり、戦時、災害時とも傷病者の生命を救い苦痛をやわらげることは、赤十字本来の人道・博愛精神の実践にほかならないという観点から、明治25年日本赤十字社規則に災害救護に関する規定が新たに付け加えられました。これは世界に先駆けての実施であり、その後国際的な赤十字活動に大きな影響を与えました。

広島県支部の災害救護活動

戦争が終わり平和な時代を迎えてから、災害救護は日本赤十字社の最も重要な事業の1つになりました。

広島県支部は様々な災害に対して速やかに対処し、救護班の派遣、救援物資の配布、義援金の募集などにより被災者の救援に努めてきました。

【明治期】

年　月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
明治10年5月		博愛社(日本赤十字社の前身)創立
明治19年10月 11月		広島博愛病院開院 広島博愛社設立
明治20年5月		博愛社の名称を日本赤十字社に改称
明治21年7月	磐梯山噴火による初の災害救護活動を実施。	日本赤十字社広島支部設立
明治23年4月		日本赤十字社が看護婦養成を開始
明治26年2月		広島博愛病院に看護婦養成所開設
明治27年8月	日清戦争開戦。海軍兵站兼碇泊場司令部があった宇品港に輸送される戦傷病兵の看護のため、看護婦20名を含めた赤十字救護班を本社において組織し、広島陸軍予備病院に配属。その後も広島支部を含め、多くの支部から看護婦が派遣される。	
明治28年7月	日本の鉄道が体験した、およそ初の大量死傷事故とされる列車転覆事故が尾道－糸崎間にて発生。岡山県支部、広島県支部より救護班を派遣。	
明治32年9月	米国政府輸送船の沈没事故発生により、救護班を派遣。	
明治33年8月	北清事変の勃発により、救護班を天津に派遣。	
明治36年6月 7月		支部社屋新築移転
	安芸郡倉橋村(現在の呉市倉橋町)および賀茂郡広村、仁方村(現在の呉市広地区および仁方地区)に水害が発生。救護班を派遣。被災者66人の救護にあたる。	
明治37年2月	日露戦争開戦。宇品碇泊場司令部、広島陸軍予備病院、呉海軍病院などが存在していたため、全国から多くの救護班が広島に派遣される。広島支部の救護班も各施設に配属され、戦傷病兵の救護にあたる。	

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
7月	日露戦争の戦場となった中国大孤山・遼陽などへ広島支部編成の看護人(男性)を主体とした救護班(44名)を派遣。	
明治40年7月	安芸郡で水害発生。特に奥海田、矢野、坂地方(現在の安芸郡海田町、安芸区矢野、安芸郡坂町)で137人が死亡。救護班を派遣。	



当時の広島支部社屋



広島陸軍予備病院における赤十字看護婦の救護活動

【大正期】

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
大正3年11月	第一次世界大戦の傷病者救護のため、佐世保海軍病院に救護班(24名)を派遣。	
12月	第一次世界大戦中、本社は、英國に救護班26名を派遣。この中に広島支部養成の山本ヤヲが看護婦長として参加し、英國の赤十字病院で約1年間勤務。	
大正6年12月	山陽鉄道瀬野駅付近で、旅客列車が岩嶂に衝突、多数の死傷者が発生したため、救護班を派遣し負傷者の救護にあたる。	
大正7年8月	日本のシベリア出兵に際し、チェコスロバキアの負傷兵看護のため、本社編成シベリア派遣救護班に広島支部から4回にわたり6名を派遣。	
大正8年7月	県内各地で豪雨により未曾有の洪水が発生。特に被害の大きかった福山市、広島市などに救護班を派遣し、各地を巡回。	
12月	軍隊に流行性感冒が大発生し、広島衛戍病院、呉海軍病院に救護班を派遣。	
大正9年5月		フローレンス・ナイチンゲールの業績を記念して、赤十字国際委員会は、第1回ナイチンゲール記章の受賞者を発表。全受賞者51名のうち、広島支部出身の山本ヤヲを含む日本人3名が受賞。
大正10年2月	軍隊に流行性感冒が大発生し、看護婦10名を派遣。	

第13章 広島県支部における災害救護活動の歴史

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
7月	広島支部常設救護所を支部に併設(現在の広島赤十字・原爆病院敷地内)。無料診療を行う。	
9月	佐伯郡四和・津田・浅原各村で水害が発生し、救護班を派遣。広島県では罹災民救助基金から規程の許す最大限の救助を行うこととなり、日本赤十字社広島支部と愛國婦人会広島支部が5百円余の日用品を急送。	
大正15年9月	11日未明からの集中豪雨により、安佐郡、安芸郡、佐伯郡内で水害が発生。救護班を派遣。 23日には、安芸郡中野村(現在の広島市安芸区)の安芸中野駅付近で畠賀川の決壊による築堤の崩壊により特急列車が脱線転覆。負傷者救出のため救護班を派遣。	



シベリア出兵で用いられた患者護送列車



救護所での救護活動(関東大震災)

【昭和期】

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
昭和2年3月	京都府北丹後地方で大震災発生。救護班1班を派遣。	
昭和7年2月	上海事変が勃発。広島支部の救護班が派遣される。	
昭和8年5月	賀茂郡川尻町(現在の呉市川尻町)に腸チフスが発生。支部看護婦を派遣し、看護にあたる。	
昭和11年7月		日本赤十字社広島支部病院建設のため、支部の事務所を広島市猿楽町(現在の相生橋東海岸、産業奨励館(原爆ドーム)の隣)に移転。
昭和12年8月	日中戦争開戦。8月3日には、最初の広島支部救護班が病院船の勤務に就く。以後太平洋戦争終結までの間に、国内をはじめ中国・東南アジアなどに救護班を順次派遣。	
昭和14年4月		日本赤十字社広島支部病院救護看護婦生徒養成部(後の広島赤十字看護専門学校)開設。

年　月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
5月		日本赤十字社広島支部病院開院。同院は5月8日広島陸軍病院赤十字病院として軍患者の収容にあたる。
昭和18年1月		広島支部病院を広島赤十字病院に改称
昭和18年7月		日本赤十字社広島支部庄原療院(昭和24年庄原赤十字病院に改称)開院。
9月	11日に鳥取地震発生。広島を含む関西以西の10支部から救護班を派遣。鳥取支部・鳥取赤十字病院も甚大な被害を受けた。 24日に島根県で水害が発生し、救護班を派遣。	
昭和19年11月		呉赤十字病院開院。
昭和20年7月		呉市大空襲により、呉赤十字病院全焼。
昭和20年8月	広島に原子爆弾投下。広島支部は、爆心地に位置していたため、建物は全焼、職員の半数は被爆死(在籍33名、死亡15名)。以後は事務所を広島赤十字病院内に移転。赤十字病院の建物も大きな被害を受け、病院関係者51名が殉職。このような中、病院は建物前面に赤十字旗を掲げ、不眠不休で被爆者の救護にあたる。山口・岡山・鳥取各県支部から受援。	
昭和21年1月	戦後、広島第一救護班を編成し、国立大竹病院に派遣。在外将兵および一般引揚者の救護にあたる。以降第5班まで編成し、大竹検疫所・宇品検疫所・佐世保地方援護局に派遣。	
昭和22年9月	カスリーン台風により関東地方を中心に甚大な被害が発生。本社は広島支部救護班2班を含む全国33支部から救護班延553班を派遣。	
昭和24年3月	広島市松原町(広島市南区)において火災が発生し、649戸が罹災。救護班4班を順次派遣。	
昭和26年10月	死者・行方不明者143人もの犠牲者を出したルース台風による被災地(佐伯郡大竹町、浅原村、水内村(現在の大竹市、廿日市市浅原、広島市佐伯区湯来町))に救護班4班を順次派遣。	
昭和27年4月		三原赤十字病院開院。
7月	瀬戸内海沿岸一帯に豪雨災害が発生。9日には豊田郡沼田町(現在の三原市沼田町)、11日には三原市西野町に救護班各1班を派遣。また、29日には広島県北部比婆郡(現在の庄原市)で豪雨災害が発生し、庄原赤十字病院から救護班1班を派遣。	
8月		日本赤十字社法が制定公布。
10月		新定款により、広島支部は広島県支部と改称

第13章 広島県支部における災害救護活動の歴史



壊滅的な被害を受けた広島赤十字病院



被爆者の治療

年　月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
昭和28年 6月	中国からの帰還事業に従事。終戦時国外に在留していた約662万人の日本人の帰還事業に、国際的な中立機関である赤十字も重要な役割を果たす。中国からの第4次引揚げ船白竜丸に服部広島県支部事務局長が赤十字代表として救護班員7名とともに乗船し、引揚者の救護に従事。また、帰国者への無料診療を実施(昭和33年まで)。 28日には北九州大水害が発生。門司市に救護班を派遣し巡回診療を実施。	
昭和29年 7月		血液銀行を広島赤十字病院内に開設。
昭和31年 9月		日本赤十字社広島原爆病院開院。原爆被爆者の専門的な治療機関設立の要望が高まり、広島赤十字病院敷地内に開院。
昭和32年 4月	三原沖で第五北川丸の転覆沈没事故が発生。死者94人、行方不明19人。三原赤十字病院から救護班を派遣。要救助者16人を収容。	
昭和33年 6月	島根県および県内の高田郡吉田町(現在の安芸高田市吉田町)一帯で水害が発生。広島県支部から救護班を派遣。	
8月		糸崎療院の名称を糸崎赤十字病院に改称。
10月		広島県支部が社屋を広島市千田町二丁目に新築移転。 (鉄筋コンクリート2階建 延床面積508.83m ²)
昭和38年 2月	佐伯郡廿日市町で集団赤痢発生。6月には福山市で集団赤痢が発生し、救護員を派遣。	
昭和39年 3月		糸崎赤十字病院閉院。
昭和40年 2月		広島県赤十字血液センターを広島市千田町二丁目支部敷地内に新築。献血受入体制を整備。

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
6月	温帯低気圧の接近により県西部で豪雨災害が発生。安佐郡高陽町(広島市安佐北区)の三篠川が決壊。広島赤十字病院から救護班2班を順次派遣。	
昭和42年7月	8日に呉市・三原市をはじめ県中東部に水害発生。死者・行方不明162人。被災地へ救護班4班を順次派遣。 27日に広島市基町で大火発生し、救護班延べ14班を派遣。	
昭和47年7月	広島県北部一帯に豪雨による水害発生。死者35人、行方不明4人。1,714枚の毛布、9,316組の日用品を送るとともに、救護班2班を順次派遣。	
昭和51年9月	台風第17号により、県東部で集中豪雨が発生。死者14人、行方不明2人。毛布、日用品セットを地区・分区に配布。	
昭和58年7月	島根県西部を中心に山口・広島で集中豪雨が発生。死者・行方不明112人。毛布2,000枚、日用品セット1,104組を急送。また被災した益田赤十字病院に、広島赤十字病院、三原赤十字病院から救護班各1班を派遣し、医療援助(病院支援)を実施。	
昭和59年3月	広島県支部に災害業務用無線局開局	
昭和63年4月		広島赤十字病院と広島原爆病院が合併し、広島赤十字・原爆病院として新発足。
7月	県北西部豪雨災害発生。死者14人。加計町、戸河内町、筒賀村(現在の安芸太田町)などへ救援物資を急送。東京都支部から、災害救援用バスタオル2,500枚の緊急支援を受ける。	

【平成期】

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
平成元年9月	台風第19号により岡山県内で大きな災害が発生し、同県支部から災害救援物資の急送の要請。毛布2,000枚、日用品セット2,500組を被災地に向け発送。	
平成2年2月	旧ソ連のアルメニア共和国地震被災者救援事業として広島赤十字看護専門学校教師(看護師)1名を派遣。	
平成3年9月	台風第19号による毛布・日用品セットなどの救援物資を被災地に発送。救援物資が不足し、緊急購入するとともに、岡山・山口・大阪府支部に救援物資の急送を要請。	
平成7年1月	阪神・淡路大震災発生。広島県支部では医療救護班(21班、170名)の派遣や、毛布・日用品セットなどの救援物資を配布。	
平成8年10月	広島市中区で高層住宅火災発生。毛布150枚、日用品セット世帯用50個、個人用150個を急送。	
平成10年9月	高知豪雨水害発生。毛布2,000枚、日用品セット2,000組を急送するとともに、職員3名、ボランティア2名を災害救護活動応援要員として派遣(3日間)。	

第13章 広島県支部における災害救護活動の歴史

年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
平成11年 6月	広島市、呉市を中心とした大雨災害発生。救護班5班を順次派遣。救援物資が不足し、本社・他県支部からの救援物資の支援を受けつつ県内の地区・分区などに毛布5,621枚、日用品セット2,516組、お見舞い品セット832組、寝衣、非常食などを配布。	
平成11年10月	茨城県東海村にて臨界被曝事故発生。茨城県から被ばく者医療などの実績を有する施設を持つ広島県および長崎県に対し支援要請があり、広島赤十字・原爆病院から救護班1班を派遣。	
平成12年 4月		日本赤十字広島看護大学開学。
平成13年 3月	芸予地震発生。災害毛布227枚、日用品セット106個を地区・分区に配布。	
平成14年 3月		広島赤十字看護専門学校閉校。
平成16年 8月	台風第16号発生。県内各地区・分区に毛布2,236枚、日用品セット1,132組を配布。また岡山・香川県両県支部に毛布1,000枚、日用品セット600組、お見舞品セット150組を急送。	
9月	台風第18号発生。廿日市市港第一岸壁に停泊していたカンボジア船籍の木材運搬船が沈没。船員の救護にあたるため、救護班1班が出動。また、県内各地区・分区に毛布193枚、日用品セット113組を配布。	
平成16年10月	新潟県中越地震 広島赤十字・原爆病院、庄原赤十字病院から救護班各1個班とこころのケア要員を派遣。 台風第23号発生。被災地となった香川県に毛布400枚、日用品100組を急送。	
12月	スマトラ島沖地震・津波災害発生。被災地へ支部職員2名を派遣。	
平成21年 7月	中国・九州北部豪雨発生。山口県支部からの要請により毛布2,000枚、安眠セット410組を急送。	
平成22年 1月	ハイチ地震発生。被災地の復興支援のため、支部職員1名を派遣。	
7月	庄原市で記録的な集中豪雨が発生。毛布・安眠セットなどの救援物資を配布。庄原赤十字病院では職員80名が病院に待機し、災害による被災者へ対応できる体制を取った。	



阪神・淡路大震災



年 月	過去の災害救護活動	日本赤十字社広島県支部のあゆみ
平成23年 3月	東日本大震災発生。この災害に対し、医療救護班計14班をはじめ、被災者の精神的苦痛を和らげるためのこころのケアや石巻赤十字病院への支援、原発被害に対する被曝健康相談など、延1,230名を派遣。また緊急セットなどの救援物資を配布。	
7月	山口県にて豪雨災害発生。安眠セット290組を急送。	
平成24年 4月		日本赤十字社中四国ブロック血液センター運営開始。
12月		広島県支部社屋移転。
平成25年 9月	尾道市で発生した大雨により、災害救援物資を急送。	
平成26年 8月	台風第11号および第12号に伴う大雨災害発生。毛布500枚、緊急セット180セットを高知県支部へ急送。	
8月	20日に広島市安佐北区・安佐南区で豪雨による土砂災害発生。日赤DMATを現地に派遣。広島赤十字・原爆病院では6人の患者を応需。救護班1班を現地に派遣し、日赤DMATと交代。2日後には広島市の要請により、救護班を追加派遣し、24時間体制での救護活動を実施。さらに、巡回診療の期間延長の要請があったことから、第5ブロック各県支部にも派遣要請し、合計16救護班、延218名の救護班要員の協力を得て救護活動を展開した。また災害救援物資の搬送は、防災ボランティアの協力を得て、毛布1,110枚、緊急セット522組、安眠セット70組を避難所に配布。	
平成28年 3月	広島県東広島市山陽自動車道下り八本松トンネルにて車10台の玉突き事故が発生。広島赤十字・原爆病院DMAT、三原赤十字病院DMAT計2隊を派遣。	
4月	熊本地震発生。14日・16日と短期間に2度の最大震度7の大地震が発生。16日に本社からの出動要請があり、広島県支部救護班第1班が出発。広島県支部は救護班7班、延67名の救護班要員、こころのケア班1班5名、血液輸送要員1名、病院支援要員(看護師)2名を派遣した。災害救援物資の搬送は、防災ボランティア6名の協力を得て、毛布4,500枚、安眠セット627組を熊本・大分両県の避難所に配布した。	



東日本大震災



広島豪雨災害(平成26年)

注 看護職の職名について、保健師助産師看護師法(昭和23年法律第203号)における名称変更が行われた平成13年以前の年譜においては「看護婦」と記載しています。